OS-01「オノマトペの利活用」

オーガナイザ：小松　孝徳（明治大学）
中村　聡史（同　上）

「オノマトペの研究，とりあえずマルッと集めてみましょうか？」というヒゲでメガネなオーガナイザ二名の軽い思い付きから始まった，オーガナイズドセッション（以下，OS）「オノマトペの利活用」．2011年の盛岡，2012年の山口での開催に続いて，2013年の富山での開催も成功裏に終えることができました．人工知能学会の事務局の皆様，2011年，2012年，2013年度のOS担当プログラム委員および評者の皆様，そしてこのOSに参加していただいたすべての皆様，さらには会場を「ちらっ」とでものぞいてくれた皆様に心より御礼申し上げます．

そこで本稿では，今年度だけではなく，これまで3年間にわたって開催してきました本OSの活動を振り返ってみたいと思います．

1年目：研究者同士の「出会いの場」

本OSでは当初，「オノマトペを工学的に研究している人，とりあえず集合！」という広報活動を行ったこともあり，全国各地からオノマトペを工学的に扱う研究を行っている方々を一堂に会することができました．具体的な研究分野としては，情報検索，ロボット工学，画像処理，メディア表現など，その分野は非常に幅広いものでした．「あっ，○○さんも，オノマトペの研究をされていたんですね？」といった，意外な出会いをOSの会場で見掛けることも多かったのではないでしょうか．これら一堂に会した研究の位置付けを議論することで，オノマトペ研究が進むべき方向性を明らかにすることができたのは，本OSの大きな成果の一つだったのではと考えています．

2年目：分野横断的コラボレーション

世の中には，いわゆる「文系 or 理系」といった偏った視点で世界を捉える人が多いようです．あいにくオーガナイザ2名はそのような考えはもち合わせておりませんので，自分達の知らない分野にてオノマトペを研究している研究者の方々を「どんどん」このOSの流れに巻き込んで，オノマトペという現象を分野横断的に捉えようと考えました．幸いにもこのような考えに賛同していただいた，言語学，認知心理学，心理学，臨床心理学などの分野でオノマトペを研究している方々をOSに巻き込み，その分野でのオノマトペ研究の課題について議論することができました．そしてその結果，さまざまな専門をもつ研究者同士で相補的な関係を模索することもできました．これらのコラボレーションはまだ始まったばかりですが，このOSをきっかけとした共同研究の成果が，論文などの具体的な成果として公表されることはそう遠い未来の話ではないと感じています．

図1　2013年富山での具体的研究成果：「きときと」なお寿司．左から，マアジのジュレ，カンパチトロ，そして白エビ．「金目鯛チャレンジ」に関する議論も行われた

3年目：具体的な成果

「結局，本OSの具体的な成果とは何だったのか？」もちろん，本OSに投稿された論文こそが「成果」であることは間違いないのですが，対外的にアピールできる成果として最も顕著なものは，2013年6月11日にNHK総合テレビで放映されたクローズアップ現代「“ぱみゅぱみゅ”“じぇじぇじぇ”～「オノマトペ」大増殖の謎～」[*1]の中で，本OSにてご発表いただいた方々の研究成果が大々的に取り上げられていたことではないでしょうか．もちろん「メディアに取り上げられる研究をエンカレッジすること」が本OSの目的ではないのですが，オノマトペ研究の重要性を理解した「同士」の研究が幅広く発信されたことは，オーガナイザとして非常に誇らしく感じています．

ということで，「ざっくり」とこのOSでの3年間の活動について振り返らせていただきましたが，「オノマトペを利活用する！」という共通の目的をもつ研究者同士のネットワークを構築できたことが，本OSをオーガナイズした二人にとって，何よりも大きな成果だったのかもしれません．我々オーガナイザは，この3年間の成果を踏まえたうえで，「オノマトペの利活用」という枠組みを「もっともっと」広く，さらに「ずんずん」と奥深く展開していくことを考えています．今後の「オノマトペの利活用」の動向，これからも要チェックです！

なお，本OS発の論文特集「オノマトペの利活用」を企画しました．詳しくは本誌会告10ページを参照ください．　〔小松　孝徳，中村　聡史（明治大学）〕

---

*1 http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3362_6.html